Okayama EU Letter

岡山EU協会会報 2013.9









★ 2013年度理事会・総会開催 新会長に泉史博氏 ★

2013年度理事会・総会が6月17日、岡山市内のホテルで開かれ、任期満了に伴う役員改選の結果、会長の中島基善氏(岡山経済同友会顧問、ナカシマホールディングス社長)の後任に泉史博氏(岡山経済同友会代表幹事、中国銀行会長)を選んだ。中島氏は筆頭理事に就任した。

総会には会員約80人が出席(委任状を含む)、本年度の事業計画なども承認した。記念講演は「ワーワー騒ぐばかりのイタリア人を『空回り型バカ』と呼ぶなら、日本人は『思考停止型バカ』だ」という意見の持ち主の在日20年のイタリア人建設家で、文化団体ダンテ・アリギエーリ協会東京支部会長のファブリツィオ・グラッセッリ氏が「イタリア人と日本人、どっちがバカ?」の演題で講演した。この後、懇親会を開きチェロ、ピアノ演奏をバックに楽しいひと時を過ごした。

第1号議案 2012年度 事業報告

1、欧州の経済・文化事情についての勉強強化のため「EU講座」 を充実する

岡山EU協会が発足した翌年の2010年4月、もっと欧州の文化や経済事情を知ろうとこのEU講座をスタートさせました。本年度は3回開催し4月、近現代美術修復の第一人者・吉備国際大学の大原秀之教授から「ヨーロッパ近現代美術を見る眼-保存修復の視点から」と題する講演を聴き、その後、懇談会を開き懇親を深めました。同様に9月には、日本フラメンコ協会理事で東京在住の舞踏家・鈴木眞澄さんの来岡の際に「フラメンコ〜五感を駆使して喜怒哀楽を表現する」との講演と実技を、また12月には岡山大学の田口雅弘教授から「欧州の新しい戦略拠点-ポーランドの東から北への道」の講演を賜りました。

2、「EU Letter」の継続発行

年1回発行しています。本年度も理事会・総会での決定事項、総会の記念講演の要旨、ホームページに掲載したイベントレポートなどをとりまとめて発行しました。

3、岡山 E U 協会のホームページの充実

2010年5月に岡山県立大学情報工学部、デザイン学部の教授、学生の協力を得て立ち上げました。現在、会長あいさつ、協会の会則

などを常時掲載しているほか、理事会・総会、EU講座の開催日のお知らせをイベントカレンダーとして掲載、また、その結果をイベントレポートとして報告しています。他のEU協会ともリンクを張り、それぞれの活動状況が分かるようにしています。

4、駐日欧州連合代表部が行う「EUがあなたの学校にやってくる」などの受け入れ

E U加盟国の駐日大使や外交官などが2007年から毎年5月に、全国の高校に出向きE Uおよび出身国の状況を説明する出張授業を行っています。本年は県立勝山高校だけでした。(昨年は5校、一昨年は3校、2013年は4校)

5、EUとの友好促進事業の実施・共催

駐日EU代表部のPR用バスが全国キャンペーンを展開。6月、 岡山商科大学がEUバスを受け入れ、ルディ・フィロン広報部長の 講演の後、学生たちと欧州財務危機、通貨ユーロ安問題などについ て議論しました。11月には、岡山経済同友会と合同講演会を開き、 元ユーログループ議長特別顧問のギュンター・グロッシェ氏から 「ユーロランドの債務危機からの脱出」の講演を聴きました。12月、 EU協会全国総会が東京の代表部で開かれ、活動報告などが行われ た後、ノーベル平和賞受賞記念祝賀会も開かれました。

第2号議案 2012年度 決算報告

 $(2012. 4.1 \sim 2013. 3.31)$

収支決算

収入総額 ¥2,954,477 支出総額 ¥1,449,726

差引残高 ¥1,504,751 (2013年度に繰り越し)

収入の部

科 目	予算額	決算額	差引額	摘 要
法人会費収入	¥1,260,000	¥1,240,000	¥ -20,000	@20,000 × 62
個人会費収入	¥245,000	¥220,000	¥ -25,000	@5,000 × 44
総 会 会 費	¥168,000	¥147,000	¥ -21,000	@7,000×21
講座 会費	¥500,000	¥327,000	¥ -173,000	E U講座参加会費 第8回17名、第9回16名、第10回12名分
事 業 収 入	¥0	¥0	¥0	
その他雑収入	¥150	¥225	¥75	普通預金利息収入
前年度繰越金	¥1,020,252	¥1,020,252	¥0	
合 計	¥3,193,402	¥2,954,477	¥ -238,925	

支出の部

الح	χμου _μ							
	科 目		予算額	P算額 決算額		摘 要		
総	会	費	¥550,000	¥550,022	¥22	6/15岡山国際ホテル		
事	業	費	¥1,200,000	¥693,228	¥ -506,772	・E U講座費用 4/14第8回 128,540円 9/20第9回 239,950円 12/20第10回 293,068円 ・ダーツ購入 31,670円(4/4第11回E U講座にて使用) ・合同講演会 55,025円		
広	報	費	¥150,000	¥137,209	¥ -12,791	・ホームページ維持費用 6,140円 ・会報(EU letter)4号発行 86,625円 ・講演要約原稿料(2回分) 44,444円		
事	務諸	費	¥100,000	¥69,267	¥ -30,733	・通信費 33,387円 ・出張旅費 7,000円・消耗品費 24,150円 ・その他雑費 4,725円		
予	備	費	¥200,000	¥0	¥ -200,000			
1	合 i	計	¥2,200,000	¥1,449,726	¥ -750,274			

会計監査報告

2012年度の会計について監査を執行し、収入・支出ともに正確に記帳整理されており、帳簿・証拠書類の保管は完全であることを認める。

2013年6月3日

西本和馬魯

點 阁岭 秭

役員選任の件 〔第3号議案〕

名誉会長 岡山経済同友会顧問 越宗 孝昌 (再任) 会 長 岡山経済同友会代表幹事 史博 (新任) ルディ・フィロン (再任) 副会長 駐日欧州連合代表部広報部長 岡山大学学長 潔 (再任) 副会長 森田 副会長 岡山県国際経済交流協会会長 宮長 雅人 (交代) 副会長 岡山県経営者協会会長・岡山県国際交流協会会長 末長 範彦 (再任) 顧 問 岡山県知事 伊原木隆太 (交代) 駐日欧州連合代表部大使 ハンス・ディートマール・シュヴァイスグート (再任) 顧 問 事 岡山経済同友会顧問 理 中島 基善 (再任) 事 理 岡山県経済団体連絡協議会座長 中島 博 (再任) 理 事 岡山経済同友会代表幹事 萩原 邦章 (再任) 理 事 岡山経済同友会常任幹事 古市 大藏(再任) 理 事 岡山県中小企業団体中央会会長 武田 修一(再任) 大学コンソーシアム岡山会長 理 事 波田 善夫 (再任) 事 岡山県文化連盟会長 若林 昭吾 (交代) 理 理 事 福武教育文化振興財団理事長 福武總一郎 (再任) 理 事 岡山市長 髙谷 茂男 (再任) 理 事 倉敷市長 伊東 香織 (再任) 事 越宗 孝昌 (再任) 理 山陽新聞社社長 憲一 (再任) 理 事 山陽放送社長 原 事 岡山放送社長 宮内 正喜 (再任) 理 理 事 テレビせとうち会長 大田 弘之 (再任) 監 事 岡山県商工会議所連合会会長 岡﨑 彬 (再任) 西本 和馬 (再任) 監 事 岡山県商工会連合会会長

2013年度 事業計画 「第4号議案]

- 1、欧州の経済・文化事情についての勉強会「E U講座」を充実する
- 2、欧州映画会「EU フィルムデーズ」の第2回開催
- 3、「EU Letter」の継続発行
- 4、岡山EU協会のホームページの充実

- 5、駐日欧州連合代表部が行う「EUがあなたの学校にやってくる」 などの受け入れ
- 6、EUとの友好促進事業の実施・共催

〔第5号議案〕

(2013年4月1日~2014年3月31日)

収入の部

科 目	2012実績	2013予算	差引額	摘 要
法人会費収入	¥1,240,000	¥1,260,000	¥20,000	@20,000×63(3法人增強)
個人会費収入	¥220,000	¥270,000	¥50,000	@5,000×54(3人增強)
総 会 会 費	¥147,000	¥168,000	¥21,000	総会参加会費 @7,000×24
講 座 会 費	¥327,000	¥500,000	¥173,000	EU 講座会費など(4回開催予定)
事 業 収 入	¥0	¥250,000	¥250,000	EU フィルムデーズチケット代 @500×500
その他雑収入	¥225	¥150	¥ -75	預金利息
前年度繰越金	¥1,020,252	¥1,504,751	¥484,499	
合 計	¥2,954,477	¥3,952,901	¥998,424	

支出の部

	科 目		2012実績	2013予算	差引額	摘要
総	会	費	¥550,022	¥700,000	¥149,978	総会費用(会場、懇親会、講師謝礼)
事	業	費	¥693,228	¥1,700,000	¥1,006,772	EU 講座費用 約300,000円×4回、 フィルムデーズ費用 500,000円
広	報	費	¥137,209	¥150,000	¥12,791	会報、ホームページ費用
事	務 諸	費	¥69,267	¥100,000	¥30,733	通信費、消耗品費、出張旅費、その他雑費
予	備	費	¥0	¥200,000	¥200,000	
次	年 度 繰	越	¥1,504,751	¥1,102,901	¥ -401,850	
í	含	t	¥2,954,477	¥3,952,901	¥998,424	

講演要約

「イタリア人と日本人、どっちがバカ?」

(6月17日 岡山EU協会2013年度理事会・総会 岡山プラザホテル) 講師 ファブリツィオ・グラッセッリ ダンテ・アリギェーリ協会東京支部会長

ファブリツィオ・グラッセッリ氏の紹介



1955年、イタリア・ミラノ近いクレ モーナに生まれる。

ミラノエ科大学を卒業後、建築家として数か国で活躍し、その後日本に魅せられ、永住を決意。東京に住んで20年余り。イタリアの芸術、文化、語学を教える正式の免許を持ち、こちらを、もう一つのライフワークとしている。現在は、イタリアで最も古い伝統と権威を持つ文化団体『ダンテ・アリギエーリ協会』の東

京支部会長を務め、同団体が設立したイタリア語学校『イル・チェントロ』の校長でもある。また、慶應義塾大学でも教鞭を とっている。

著書に「アモーレ・ディヴィーノ」(トラベルジャーナル)、「イタリア人と日本人、どっちがバカ」(文春新書)がある。

まず初めに、今回の公演を企画された皆さん、そしてお集まりいただいた皆さんにお招きいただいたことを感謝いたします。

私が書いた本「イタリア人と日本人、どっちがバカ?」の中には、文中に出てくる、典型的なイタリア人の例である「ビアンキ氏」が、テレビの中で、ベルルスコーニ政権の終焉と、新しいモンティ内閣の誕生を、呆然と見つめている、そういう状況が描かれていました。この政権交代は、2011年の11月にあった出来事です。

そのモンティ政権は、政治家でなく、実務者によって作られた内閣でした。彼等みな、国民の選挙によって選ばれた人々ではなく、共和国大統領のジョルジョ・ナポリターノによって直接指名されたメンバーだったわけですが、それ以来、選挙で選ばれた政治家による内閣が再び出来るまで、私たちは2013年の4月27日まで待たなければなりませんでした。

新しい現内閣、エンリコ・レッタ内閣について語るとき、私は、それがイタリアの二大政党、PD=民主党と、PDL=自由の人民との間の、妥協によって作られた内閣である、ということを言っておかなければなりません。

この政府はイタリアの政党のうち、北部同盟と、極 左、極右の政党、ちなみにこれらはこの4月の選挙 で、著しくその数を少なくしてしまった政党なわけで すが、これらを除く、イタリアの全ての政党の連合に よって作られたものです。

広範囲にわたる政党の連合によって出来た政府が皆 そうであるように、レッタ政権もまた(ちなみにレッ タ氏は民主党に所属しますが)根本的な弱さを持った 政府です。この政府は、様々な政治家グループのあい だで行われる、持続的な妥協と仲介の手続きを持って 初めて存続できる、というような存在です。ですから、 イタリアの政治状況は、いまだもって不安定で危なっ かしいものであるといえます。

そしてこのイタリア政治の不安定さは、共和国大統領のジョルジョ・ナポリターノが再選されたということも、明らかな証拠であるといえます。これはつまり、彼の代わりになる人を、誰も見つけられなかったということを意味しています。ちなみに、退任する共和国大統領が再選されたというのは、1946年にイタリア共和国が発足して以来、初めての出来事でした。

このレッタ政権の発足と、ナポリターノ大統領の再 選という出来事が、政治的な妥協と混乱と不安定の中 で起きたというのは、たとえて言えば建物が火事に なった時の、一種の緊急避難口のようなものだといえ るでしょう。つまり、これが火に包まれた建物からな んとか脱出するための唯一の方法であったわけです。 しかし、彼らは建物の火を消すことができたわけでは ありません。イタリア政治の世界の非情な不安定さと いう、一種の火災は、まだ燃え盛っているのです。

しかしやはり、この政治的妥協は、避けがたいものだったと言わざるを得ません。なぜならイタリア人は、この前の4月の選挙で、どの政党が政権を取れば良いのか、ということを決められなかったからです。そしてこの政治の舞台での妥協による政治劇の主役を務めたのは、またしても、シルヴィオ・ベルルスコーニでした。彼は4月の選挙の直後、既にこの連合政権の構築を提案していました。その間、下院で一番多くの議席数を取った民主党は、内紛によって、分裂の危機にありました。そしていまだに、レッタ政権の誕生をめぐって、内紛のさなかにあります。

しかし、4月の選挙における、民主党と自由の国民の得票率を合わせると、約59%になります。これは、その前の選挙、すなわち2008年の選挙と比べれば、ずっと少ないということは確かです。しかし、それでも59%というのは、イタリア人の投票者の過半数になります。つまり半分以上のイタリア人が、今回の選挙でも保守的な投票傾向を示したということになります。なぜなら、民主党も、自由の国民も、両方とも保守的な性格を持った政党だからです。なぜならそのどちらの政党の中にも、旧キリスト教民主党のメンバーがたくさん入っているからです。この旧キリスト教民主党と言うのは、かつてイタリアの政権党だったのですが、約20年前に、巨大な政治的汚職が摘発された事件、すなわち「マーニ・プリーテ」とよばれる出来事によって、崩壊した政党です。

もう一つ、民主党も自由の国民も、どちらも保守的な政党であるという理由は、選挙の時の公約とは違って、民主党も自由の国民も、自分たちの政治的ポジションと権力を守ることを目的にしていて、それぞれの政党に投票してくれる団体、社会的なグループを守ろう、

ということを目指している政党だからです。

しかし、民主党も、自由の国民も、彼らの支持者を 失望させているのが現実です。なぜならこの二つの政 党は、それぞれ、いまやそのアイデンティティーを喪 失してしまっているからです。

それではここで、PDと PDL はもともとどんな政 党だったのか、ということをご説明しておきましょう。

まず、PDつまり民主党について言えば、彼らは身 分を保証された、安定した立場にある労働者の権利を 守ろうという政党です。たとえそれが、社会的に違う 立場の人々の不利益になるとしても、です。民主党は、 イタリア労働総同盟を筆頭として、それから、経済的 に大きな力を持つようになっている、他の左翼系の組 合組織、そういったものの権利を守ろうとしているわ けです。こうした労働組合組織は、設立当初の、共同 体的な精神からは既にかけ離れてしまっていて、それ どころか、大きな銀行や、金融機関との癒着と言って も良いくらいの関係が出来てしまっているのです。

これに関連して、一つ思い出しておかなければいけ ないことがあります。イタリアには、モンテ・デイ・ パスキ・ディ・シエナという銀行があります。これは 現存する世界で一番古い銀行でして、イタリアでは3 番目の規模を誇る銀行なのですが、この銀行が破産の 危機に瀕する、大きなスキャンダルがありました。そ こで明らかになったことは、この銀行の経営者や経営 人のほとんどが、民主党、つまり左翼の一番主要な政 党と深いつながりを持っていた、ということなんです。

ここで重要なのは、イタリアの民主党というのは、 過去20年の間に、何度も名前を変えてきたのですが、 近代的で進歩的な政治手法というものは、何も生み出 すことができないままで来たわけです。つまり、民主 党は、イタリア版のトニー・ブレアも、ビル・クリン トンも生み出すことが出来なかった。そしてイタリア 版のゲアハルト・シュローダー、ご存じのようにこの 人は、1998年から2005年までドイツの首相を務めた、 ドイツ社会民主党の党首ですが、つまり本物の、「穏 健左派」的な人物も生み出すことができなかったわけ

これが、おそらくイタリアの左派の最も大きな問題 です。つまり、私たちがいま生きているポストモダン の世界、すなわち「ポリティカリー・コレクト」とか 「カルチュラル・シック」などという、アングロサク ソン的な「知」の体系が出来てきた社会、もっと端的 に言えば、古い、革命的な左翼主義が、一見矛盾する 市場原理を受け入れて、それがすべて混在する社会の 中で、自分の政治的役割を、何も見出すことができな かったということです。

それではベルルスコーニが作ったもう一つのイタリ アの大政党、PDL「自由の人民」というのは、どんな 政党であるかご説明しましょう。これは、主に中産階 級、小規模なブルジョアの利益を守るためにできた政 党です。それがこの20年間、実際はうまくいかなかっ たのではありますけれども……。

ここでベルルスコーニが力を持ち続けてこられた理 由を見てみたいのですが、ここ20年にわたって、彼は イタリアの中産階級によって支えられてきたわけで す。それは主に北イタリア、および中部イタリアで60 年代から90年代にかけて、社会に進出してきた、中小



企業の経営者、様々な分野の独立した専門職の人々、 こういう人たちに支えられてきたのです。

一方、イタリア南部について見ると、自由の人民は、 票と引き換えに、様々な利権を得ようとする人々、多 分一人ひとりは善良な人間なのかもしれませんが、そ うした地元の、いわゆる名士によって支えられてきま した。こうした癒着の構造に基づく利権政治が、実は イタリア建国以来150年間、南イタリアの悪い政治の 主な原因になってきたのですが、これがベルルスコー 二政権の最大の弱点でもありました。

この40年ほどの期間、アメリカの経済学者フリード マンとシカゴ学派が提唱してきた新自由主義は、世界 の政治・経済のすう勢に大きな影響を与えてきました。 しかし、それがイタリアの政治・経済に取り入れられ ることはありませんでした。なぜなら、労働組合と大 企業の経営者が、彼らの権力と利益を保持するために 採った方法は、政府と癒着し、政府からの援助資金を 受け取る、という道だったからです。そういう意味か らすると、この「ベルルスコーニズム」とも言うべき 政治手法は、イタリア流の新自由主義的な試みだった わけですが、広い意味での、新自由主義の「失敗例」 と捉えることができると思います。そしてこのイタリ ア流の新自由主義の方向性は、今ではマリオ・モンティ だけが引き継いでいるものだといえるでしょう。

ここで、新自由主義的な考えを持ったベルルスコー ニが20年前に政界入りしたのは、自分自身の利益のた め、それに加えて、検察や左派のモラリストたちの追 求・攻撃から、自分を守るためだった、と言われてい る件について考えてみたいのですが、単純にそれだけ が動機だったと、単純に決めつけるのも間違っている と私は考えます。

ここ数カ月、私が繰り返し思っていることがありま す。これは、イタリアだけでなく、よく、日本を含め た外国のマス・メディアも含めてのことなのですが、 ベルルスコーニのことを、一種の怪物、あるいは道化 者のように扱うのは、間違いだということです。その 一例として、ドイツ社会民主党の党首で、次期首相候 補ともみなされているペール・シュタインブリュック は、彼のことを、はっきり「道化者」と定義していま す。これは彼が、ベルルスコーニなどの新自由主義者 から民主的過ぎるとか社会主義的だとか言われること に我慢がならなかったからだと思いますが、間違いだ と思います。

ベルルスコーニのことを、単純に道化者だとか、怪 物だとか、またはしょっちゅう大衆紙のゴシップ欄を

にぎわす困った人だ、という見方だけしていたのでは、 彼のこの20年間にわたる、政治家としての成功の理由 を理解する事は出来ないと思うからです。

もし、敢えて彼のことを怪物とみなすならば、ちょ うど今、私の隣の席に座っている、私の友人であり、 また著作活動のパートナーでもある水沢透氏が私に 言ったことが、とてもピッタリくるたとえになると思 います。それは、ドイツの作家ミヒャエル・エンデが 「果てしない物語=ネバーエンディングストーリ―」 の中で描いている、全身が何百万という夥しい数の蜂 の集合体で出来ている、「イグラムール」という巨大 な怪物です。

ここで皆さんに想像していただきたいのですが、こ の「イグラムール」という怪物の体を構成しているた くさんの蜂、つまり働き蜂は、ベルルスコーニを支持 した、たくさんの北イタリアや中部イタリアに現れた 中小の企業主たち、彼らのほとんどは、以前は工場の 労働者や技師だったりしたような人々ですが、そうし た人々の姿をイメージさせると私は思うのです。彼ら は、最初に自由主義者として政界に進出してきた時の、 いわゆる「マニフェスト」を、必ずしも信じてはいな かったと思うのですが、それでもとにかく、彼のこと を支持したわけです。彼らは70年代以降、時代の先端 をいってきた、そして今でも時代の先端をいく企業を 作り上げてきた人たちです。また、いわゆる「メード・ イン・イタリー」のブランドイメージを、世界に広め てきた人たちです。

彼らは、彼らの経済活動にあまり干渉しない政府を 望んできました。そして、1968年以降の政治的な軋轢 から逃れて、社会と経済の仕組みを見直したいと考え た人たちでもありました。

彼らの考え方と選択が、果たして正しかったのか、 間違っていたのか、それは正直言って、私にもわかり ません。しかし、何百万という大勢の中小企業経営者 たち(ちなみにこうした北イタリアの企業経営者たち の間で、今、自殺が増えているのですが、これはまた 後に触れることにします) は、社会的な安定であると か、自分たちの会社の売り上げを上げることとか、あ るいは彼らの会社で働いている人たちのことを優先的 に考えていました。それに対して、イタリアや世界の マスメディアが、ベルルスコーニのスキャンダルばか りを追いかける「覗き見主義」には、あまり関心を示 さなかったということです。

ここで思い出していただきたいのは、4月のイタリ アの総選挙で、事実上「ただ一人の勝者」となった、 ベッペ・グリッロのことです。ベッペ・グリッロは、 もともとイタリアの有名なコメディアンで、芸能界か ら政界に乗り込んできた人物なのですが、彼と彼が率 いる政治勢力「五つ星運動」は、今から5年前には、 イタリアの政界に、まだ存在すらしていませんでした。

彼らの運動は、新しい時代の民主主義の現象です。 それは、デジタルな世界、インターネットの世界から 生まれてきた、非常に革新的な現象なのです。もちろ ん、従来の伝統的な民主主義システムの観点から見る と、若干の不安要素も感じさせる運動だとは思います が。その「五つ星運動」も、4月の選挙で成功を収め た後、早くも分裂しかかっています。この運動は、も ともと左派的な人々の間から生まれてきたのですが、

結局新しい政治手法の 提案を出来ずにいま す。そして、きちんと した新しい政治運動に 成長する前に方向性を 失い、彼らに投票した たくさんの人々を、 がっかりさせてしまい ました。

しかし、いずれにし ても「五つ星運動」を 生み出したような、市



民の政治的要望を理解しなかったことが、イタリアの 左派系政党の、一番重大な間違いだったと思います。 そして昔で言えば、もともとは北イタリアの分離独立 を党是として誕生してきた、レーガ・ノルド(北部同 盟)、そして現在で言えば、チンクエ・ステッレ(五 つ星運動) こうしたものを支持してきた人たちの、政 治・社会をラジカルに変革することを求める声、これ を無視してきたというのは、イタリア左派の大変な過 ちだと思います。多分私の本「日本人とイタリア人、 どっちがバカ?」に出てくる、主人公のビアンキさん の息子さんなどは、今であれば、きっと「五つ星運動」 を支持して、4月の選挙の時には、投票していたので はないかと思います。

また「どっちがバカ」の主人公であるビアンキ氏と、 もし今、話す機会があったとしたら、私たちはそこに、 本が出た1年前よりもずっと深刻な混乱に陥って、そ してきっと大きな怒りを抱えた人を見ることになった でしょう。

ではここで、現在のイタリアの経済状況をご説明し ておきましょう。最近イタリア労働省から発表された データを見てみると、昨年だけで、100万人以上の人 が解雇されていることがわかります。これは、2011年 に比べて、13.9%多い数字です。そして11年の最後の 3カ月間、10、11、12月だけを取り出してみると、 解雇された人の数は、2011年の同じ時期に比べて、 15.1%増の数字になっています。

今、お勤めをしている労働者や自営業者が目の当た りにしているのは、社会の中に、大小の犯罪が増加し ている状況です。そして政治の世界では、前回の選挙 を通して、多くのイタリア人が政治家たちに抗議の声 を発していることが明白になった今の状態であるにも 関わらず、そしてイタリアを襲っている深刻な経済危 機に対して、緊急の対策がなされなければいけないこ の時期にあって、それでも、民主党も、自由の人民も、 そしてその他の政党も、自分たちの権力争い、政治ゲー ムに終始している、というのが現在のイタリアの状況 です。これが、北部や北東部イタリアにあって、国の 生産システムと、イタリア経済の根幹・基盤をなして いる企業を脅かしているのです。

この経済危機というのは、イタリア経済の、まさに 屋台骨である、北イタリアや中部イタリアの中小企業 を直撃しています。そして、この状況をわかっていた だくために例を挙げたいのですが、北東部イタリアの パドヴァ県だけを取って見ても、この5年間の間に、 300もの企業が倒産しています。そしてこの状況をさ らに悪化させている要素として、イタリアの国家は、

イタリアの企業に対して、900億ユーロもの負債を抱えている状態があります。

今、イタリアでは税負担というのが52%にも及んでいるというのが現状です。それはどういうことかというと、1ユーロの富を生み出す間に、その半分以上の52セントが、税金という形で、中央政府や、地方自治体に吸い上げられてしまっているということです。それなのに、莫大な公的債務は、一向に減らない。今年の1月にイタリア銀行が出した調査報告書によると、この公的負債は、2兆227億ユーロにも上っているとのことです。途方もない数字です。

ときどき私は、自分に問いかける時があります。それは、イタリアに必要なのは、こんな政治家たちなのか、こんな役人たちなのかと。本当は答えたくないような質問なのですが、やはり答えなくてはならない質問なのだろうと思います。これは、言いかえれば、イタリア人の罪、とはいったい何なのだろうか、ということです。

ここで、この問いに答えるために、私は一つの言葉を引用したいと思います。それは、「ドイツにとってのもう一つの民主党」という新党の共同発起人であり、ハンブルグで経済学の教授をしている、自由主義者であり、保守主義者であるベルント・リュッケの言葉です。

彼はこういう風に言っています。今ヨーロッパは沈没しつつある、そしてその責任は、通貨のユーロにある。この単一通貨は、もはや欧州に平和をもたらすものではなく、逆に分断をもたらす要因になっている。南ヨーロッパでは、そのせいで経済が破綻した。それら、南ヨーロッパの、既に経済的競争力を持っていない国が単一通貨・ユーロのせいで、通貨の切り下げなどの自由な経済政策を取れなくなっているからだ、と、こういうことです。

こうした、北ヨーロッパに広がっているEUに対する懐疑的な立場の人々は、ヨーロッパがうまくいかないと、それをすぐに南ヨーロッパ諸国のせいにする、という考え方をしています。

ここで、このヨーロッパ統合に対する懐疑主義に深入りすることは、あえてしません。こういう考え方に私は賛同しませんし、肯定できる部分があるとしても、その主張の中の、ほんの一部についてです。

ただ、ここで私がお集まりの皆さんに是非強調しておきたいのは、イタリアという国とイタリア人が、政治的、地理的に見て、とても特殊なポジションにいる、ということです。どういうことかご説明すると、イタリアという国の半分、北イタリアと中部イタリアについて見ると、その社会的水準や経済生産力は、ドイツやイギリスといった、EUの中でも優等生的に見られている国々に、勝るとも劣らないレベルにあるのです。それに対して一方、イタリアのもう一つの半分、南イタリアだけを取り出してみると、経済的な様々な側面で、スペインよりも、そしてギリシャよりも低い水準にあります。これは実に深刻な問題です。

それに加えて、もう一つイタリアに関する偏見や先 入観について、それは違いますよ、と言いたいことが あります。それは、イタリア人はみんな、怠け者でず るい人たちだ、と思っている人が、たくさんいるとい うことです。

で、私が昨年書いた本の第5章でも、どういった歴

史的、文化的な背景、経緯があって、そういうステレオタイプな偏見が出てきたのか、ということを説明しています。

私は、イタリア人というのは、本当は実によく働く、 そして熱意のある人々だと思っています。それを裏付けているのが、南イタリアから北イタリアへ国内移民 した人々、あるいはイタリアから外国へ移民した人た ちが、それぞれの行った先でどんな活動をしてきたか、 社会的貢献をしてきたかという事実です。

また、ごく最近の、つまりここ数年の経済危機以前は、イタリア人というのは、非常にたくさん貯蓄して、国民としては、ヨーロッパの中でもトップクラスの金融資産を持っていたことも知っておいていただきたい。もともとのイタリア人の気質というのは、働いて、倹約して、たくさんお金を貯める、そういうよとを公の場で言う人はいないのですが、それは言うべきです。それが現実ですから。

ただ、その貯蓄をしようというイタリア人の傾向は、ここ数年、確かに弱まってきています。その最も大きな原因のひとつは、やはり長引く不況です。加えてもう一つ大きな要因が、若年層、若い人の、失業率の高さです。だから、親たちも、いつまでも息子や娘たちを経済的に援助しなければならない状態におかれています。また若い人たち自身も、仕事がないから、またもしあっても、時々しか入らない仕事や、パートタイムの仕事、あるいは非常に低い賃金の仕事しかないので、自分のために貯蓄もできないし、将来のために投資をすることもできない、というのが現状なわけです。

では、ここで少し話をもどして、イタリア統一から 現在までの、イタリアの社会政策や経済政策が、南部 イタリアに何をもたらしたかということをお話しま しょう。それは、南イタリアの人たちに「どうせなる ようにしかならない」という運命論と、ひたすら、国 の援助を待つ姿勢を植え付けてしまっただけだと思い ます。

結局イタリアの国家は、南イタリア社会に広まって しまった縁故主義ですとか、閨閥主義(ここでいう閨 閥とはファミリーを依怙贔屓する、という意味のもの です)を打破することが出来ずにいます。またマフィ ア問題や、汚職、政治的癒着の構造もなくすこともで きていません。そしてこの悪弊は、今では北イタリア にまで、そして国境線を越えて、北ヨーロッパにまで 及ぶようになってしまいました。たとえばここ2年ほ どのドイツの経済上のスキャンダルですとか、またご く最近起こったフランスの、オランド政権のスキャン ダルも、そうした例です。

この縁故主義、あるいは汚職といったものがはびこっているのは、もちろん政治の世界が一番顕著なのですが、それだけでなく、日常の世界にも及んでいます。たとえば就職先を探す時ですとか、何かの許可を得るとき、何かの免許をとる時など、多くの場面でそれがはびこっているわけです。

で、イタリアの政府は、それが右派政権であれ左派 政権であれ、これまでずっと、そうした援助金のばら まきをしてきました。そして、たとえば組合を味方に 付けるための取引をしてきました。

組合と言ってもいろいろあります。たとえば個人商

店の組合ですとか、漁師さんの組合ですとか、またホ テル経営者の組合、小規模農家の組合に至るまで、じ つにたくさんあります。そうした夥しい数の小さな、 あるいは大きな組合が、一種のロビーとなっていて、 この組合のためには、この政治家が、あの組合にはあ の政治家が、あるいは政党がというように、それぞれ の利権を守ってくれる政治家なり政党なりがあるわけ です。

こうしたことが、深刻な、政治的硬直状態をつくり 上げています。

さらに加えて、官公庁、お役所、官僚の機能不全と いうこともあります。これもまた、組合の力というの に守られていて、たとえば役人の数が多すぎるとか、 縁故主義での採用とか、様々な悪弊のもとになり、官 庁を役立たずなものにしているのです。

さらにここでもう一つ、大きなイタリアの問題とし て、学校を巡る状況があります。私は、学校というも のは社会との関係の中で、常に進化し続けるべきもの だと思っています。

しかしながら、1970年代からイタリアの学校では、 行き過ぎた「実験主義」が学校の教育プログラムの中 に横行するようになりました。これはおもに、アメリ カから導入された教育モデルに基づいたものです。そ れは確かに、知識層の考える、理論上は効果があるは ずのものだったのですが、生徒の側から見て、つまり 実際的な、現実に即した学習という観点からすると、 あまり役に立たないものだったわけです。

そしてもう一つ、現状を悪化させた要素があります。 それは、教師というものの社会的なイメージと、社会 的立場が、だんだん悪くなってきたということです。 残念ながら、その背景には、教師自身のプロフェッショ ナルとしての技量不足という問題もありました。

かつては教師という職業は、社会的に非常に誇りを もってなされていたものだったのですが、今では教師 という職業が、社会の進歩を促す主人公の一つである という観点が、教師自身にも社会の側にもなくなって、 単に何があっても、生活が保障される職業、というだ けのものになってしまったのです。

また、ここで最近の若者や学生、生徒たちのことだ けさして、無気力だとか、学習意欲がないとか、彼ら を批判するのは、あまりにも安易すぎることだと思い ます。むしろ、私たち大人が、すなわち政治家が、知 識人や学者と言われるような人たちが、私たちの子供 たちに、どんな有効な教育を与えることが出来るのか、 それを考えるべきだと思います。

さて、私の発言を、イタリアと日本の政治のありさ まがよく似ている、ということを強調して締めくくり たいと思います。

政治的な硬直状態、広くまた射程の長い観点から、 政治と経済の将来的戦略を考える能力の欠如、文化や 独自の政治的理念を生み出すことが出来ないでいるこ と、縁故主義、国民の目に見えない所で行われるパワー ゲーム、政治的な公正さの欠如と、政治不信、市民社 会からの要求や社会で起きている問題を顧みようとし ない、政治家の無神経さ、ただ目立ちたがるだけのリー ダーと、政治家たちの使う言葉の内容のなさ、それか らアメリカの世界戦略に対して一方的に追従してばか りいること、ちなみにイタリアの場合は、EUの戦略

というのも入るのですが、いま言ったような要素が、 現在のイタリアと日本の現状を、非常に似たものにし ていると思います。

一方、今日のイタリアと日本には、社会にも、物の 考え方においても、非常に違っている一面もあります。 ただ、この二つの国は、ともに第二次世界大戦による 荒廃から立ち直った国です。

そして両国には同じような、戦後の奇跡的と言って 良い経済復興があったわけですけれども、この20年の 間、特に日本の場合、ポストモダンの時代の世界の新 しい現実に対応出来なかったということが問題だと思 います。その新しい現実というのが何かと言えば、ソ ビエト連邦の崩壊、アメリカの力の相対的な衰え、独 裁的資本主義とも言うべき政治モデルを伴って現れて きた、中国の存在、こういったことが挙げられます。

そんな国際社会の状況に取り巻かれる中で、いま日 本人が選挙で、古い政治勢力である自民党を選んだと いうのは、日本人が持っている、保守的なものの考え 方の例として見ることが出来ますが、同時にこれは、 日本人にとっての弱点でもあると思います。

なぜなら、日本の知識人と言われる人たちの中から も、また一般社会の中からも、この新しい時代の、新 しい政治理念を生み出すことが出来なかったから、今 日本がこういう形になっているのではないでしょう か。そしてこれは、現在のイタリアが抱えている問題 と、まさに同じものだと私は思います。

私は、これからイタリアでも日本でも、政治という のが、もっと一人ひとりの人間に近いものになるこ と、人々が現在必要としているものに近いものになる こと、国民の願いや夢に近い存在になってくれると良 いと思っています。

ですから私は、もしも将来、皆さんにこうしてお招 きいただいて、お話しさせていただく機会がありまし たら、今度は「イタリア人と日本人、どっちがバカ?」 などという題名の本ではなく、「イタリア人は、日本 人と同じくらい賢い!」というタイトルの本を元に、 お話しさせていただきたいと思います。

そして私はここで、あくまでもオプティミスト、楽 観主義者でありたいと思っています。たしかに現実は、 私の本「イタリア人と日本人、どっちがバカ? | の最 終章に書いてあるように、地平線に、黒い巨大な雲が 現れてきている状態にあると思います。

この黒い雲は、EUの国々の中に生まれてきている、 大衆迎合主義や、ナショナリズム、EUの国同士の不 和と、通貨と政治的な統合、即ちユーロと、欧州連合 そのものとの、危機を表しています。

そしてアジア=日本においても同じように、ナショ ナリズムと、大衆迎合主義、そして軍国主義の復活が、 非常に心配されます。

こうした心配な現象を前にして、私たちは、つまり 日本人もイタリア人も、民主主義や自由や、平和といっ た言葉が、岩の上や、砂の上に書かれた虚しいもので はないことを理解しなければならないと思います。そ して、民主主義、自由、平和、これら大切な言葉は、 私たちが、辛抱強く、粘り強く、そして勇気を持って、 歴史というものの中に、毎日繰り返して、書き続けな ければならないものではないかと、私は思っています。

御静聴有難うございました。

ベント カレン

第9回EU講座~フラメンコの魅力

第9回EU講座が2012年9月20日(木)、岡山市北区のルネスホールで開かれ、 公演のため岡山入りしていた日本フラメンコ協会理事で舞踊家の鈴木眞澄さん が「フラメンコ〜五感を駆使して喜怒哀楽を表現する」と題して岡山EU協会 会員30人に、ギター、歌、踊りを交えながらスペイン発祥のフラメンコの魅力 を解説した。

鈴木さんは「東京だけでも100以上のフラメンコ舞踊教室がある。日本はイ タリア、フランスを抜き世界第2のフラメンコ人口を誇る」と話し「フラメンコはスペイン南部のアンダルシア地方 に生まれた異民族の文化で、歌から始まった。歌のテーマはいろいろで子や親への愛、恋、貧しさなど民衆の生活そ のもの」「若い女性が踊る印象が強いが、百人百通り、お年寄りが人生経験を生かして表現力豊かに踊るなど世代を超 えて楽しめる。」などと語った。また、アンダルシアの春祭り「セビジャーナス」、生きる喜びを歌った「アレグリアス」 などを鈴木さんは歌手、ギター奏者とともに華やかに披露。さらにカスタネットの使い方、複雑な足さばきなどを分 かりやすく説明した。



合同講演会~欧州債務危機からの脱出は

岡山経済同友会との合同講演会が11月29日(木)、岡山市中区の岡山プラザホテルで開か れ、元ユーログループ議長特別顧問のギュンター・グロッシェ氏が「ユーロランドの債務 危機からの脱出」と題して講演、約50人が熱心に聴いた。

グロッシェ氏はドイツ人で国際通貨基金(IMF)の理事、ドイツ財務省欧州通貨統合問 題担当課長などを務めた後、ユーロ圏各国の財務省による会合ユーログループの議長特別 顧問も務めた。岡山での公演は2010年10月に続いて2回目。



この日、グロッシェ氏はEU各国が債務危機を脱するため、財政規律の強化などに取り組んでいる現状を説明した 上で「最悪期は脱したとみられるものの、各国とも経済成長に欠けているのが最大の問題だ」などと指摘した。

第10回EU講座~「欧州の新しい戦略拠点ポーランド」 田口岡山大学大学院教授が講演

第10回EU講座が12月20日(木)、岡山市北区のホテルグランヴィア岡山で開かれ、岡山大 学大学院社会文化科学研究科の田口雅弘教授が「欧州の新しい戦略拠点 - ポーランドの東 から北への道」と題して講演した。

冷戦時代、ソ連の影響下に置かれていたが1989年8月、社会主義国の中では初の非共産 党政権を樹立。その動きがチェコ、ハンガリーなどに広がりベルリンの壁崩壊、ソ連崩壊の引き金を引く形になった。 社会主義が崩壊した当時、1000%というハイパー・インフレに陥ったが、その後、WTOや OECD加盟を経て2004年5月、 EU加盟を果たした。ユーロ導入にはゆっくり時間をかけて準備をしていたことから、今回のユーロ危機の直接的な影 響を受けることはなく、その点は幸いだったといえる。

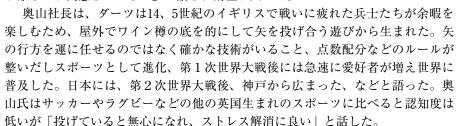
経済はここ数年、平均4~5%と日本から見てもうらやましいような成長率を達成。世界金融危機後の2009年も1.7% で、EU加盟国の中で唯一プラスを維持した。同国からチェコ北部にかけては世界の自動車、家電、液晶関係企業が多 数進出し新興市場を形成、生産はしっかりしており、これに為替安が加わり外需が堅調になったことが挙げられる。 内需も建設、消費需要が底堅く、プラス成長を支えた。ドイツ経済の影響を強く受け、ポーランド人の意識の中はド イツ経済と一体化しているといってもよい。欧州の対立軸が南北にあることを考えると、かつての東からの支配から いま、北を目指しているといえよう。ただ、ユーロ危機以降、外需は弱まり、内需も減退し2013年はなおプラス成長 ではあるが1%台にとどまりそうで、今までのような調子のよい発展は難しいと思える。特に失業率が13%台に上昇し てきているのが心配だ。

11回EU講座~ダーツでアベノミクス占う?

第11回EU講座が2013年4月4日(木)、岡山市中区の岡山国際ホテルで開かれ、岡山EU協会メンバーで総合ビル管理業の㈱研美社代表取締役社長奥山秀敏氏が「DARTSとは」と題して講義、イギリス発祥のダーツの歴史について語り、投げ方なども実演、会員ら約20人がゲームを楽しんだ。

まず、金森満廣事務局長が「ダーツは3本の矢を使う。同じように安倍内閣の アベノミクスも金融緩和、財政出動、成長戦略と3本の矢を使う。さて、どちら

が難しいか実感してほしい」と話し、講座に入った。





第2回EUフィルムデーズ開催 〜ルクセンブルク、ポルトガルなどの映画楽しむ

6月29日(土)、30日(日)の両日、岡山市北区の岡山県立美術館ホールで2年ぶり、2回目の「EUフィルムデーズ2013 in 岡山・高松」を開いた。ルクセンブルク、ポルトガルなど日ごろあまり観賞の機会のない6カ国の映画7本が上映され、映画ファンを楽しませた。

EUフィルムデーズは駐日欧州連合(EU)代表部、EU加盟大使館、各地 EU協会の主催で2003年に始まった。岡山EU協会は岡山経済同友会を主体に2009年12月、全国13番目の協会として 設立され、EU諸国の多様な文化を、映画を通じて岡山県民に知ってもらうことは非常に意義があると考え2011年に 初めて名乗りを上げた。

今回、一番人気が高かったのは29日、ファドの女王として知られるポルトガルの国民的歌手アマリア・ロドリゲス



の一生をつづった「アマリア」で四国・徳島などから駆け付けた主婦をはじめ70数人が、哀愁を帯びたアマリア自身の挿入歌にじっくりと耳を傾けた。この日は他に刑事ものサスペンス「ミッドナイト・アングル」(ルクセンブルク)、社会主義時代の不条理に鋭いカメラを向けた記録映画作家マチェイ・ドルィガスの新作「他人の手紙」「私の叫びを聞け」(ポーランド)があり、翌30日には若者3人の青春ラブストーリー「マルティナの住む街」(スペイン)、1935年開催の第1回バスケットボール欧州選手権で無名の小国が優勝、世界を驚かせた「ドリーム・チーム1935」(ラトビア)、ソ連支配下で分断された関係を20年ぶりに修復しようとする兄弟のドラマ「死と乙女という名のダンス」(ハンガリー)が上映された。入場料は1日券500円(中学生以下無料)で1映画29~73人、延255人が観賞した。

新規会員を募集しています

岡山 E U 協会会則(抜粋)

(**目的**) 岡山県とEU諸国との相互理解を深め、友好 を促進し文化、経済の交流に寄与する

(事業) 地域交流会の開催、講演会、セミナーなど

(会員)協会の目的に賛同する法人、個人

(会費) 法人は年額2万円、個人は同5,000円

※詳しくはホームページをご覧下さい http://okayama-eu.jp

岡山EU協会についてのお問い合わせ

事務局

〒700-0985 岡山市北区厚生町3-1-15

岡山商工会議所ビル5階

T E L: 086-222-0051 F A X: 086-222-3920 Eメール: info@okayama-eu.jp U R L: http://okayama-eu.jp

担当:金森大原太田